

佳作

朝会つおばあさん

兵庫県神戸市立神港橋高等学校一年 工藤 璃衣菜

感動するとは、強い感銘を受けて深く心を動かすこと、人の心を動かしてある感情を催させること、ほかからの刺激に反応することをいう。私はこの感動させてくれた人について書きたいと思う。

おばあさんはいつもいる。

おばあさんは私が登校する時間に通学路に毎日いた。私は朝はいつも時間がなくて急いでいるため走っている。ほとんどの日がおばあさんを走って横切る。横切る瞬間少しスピードを落とし、あいさつをする。ただそれだけ。おばあさんはいつも何か棒のようなものを持っていた。毎朝何をしているかなんて知らないし知ろうともしなかった。

ある日、いつもより少し早く家を出た。歩いて駅に向かっていった。しばらくするといつものおばあさんがいた。はじめは遠く、あまり見えなかったが近くになるにつれて気づいた。いつもおばあさんの手にあった「棒のようなもの」はほうきだった。その時はじめて気づいた。お

ばあさんは毎朝人の少ない時間に掃除をしていたのだ。おばあさんはほとんどの人に気づかれず密かに地域の私が無気なく通る道をきれいにしてくれていたのに、私はそんなことにも気づかず今まで素通りしていた。次の日はいつものように急いで家を出た。また今までと同じように少しスピードを落として、

「おはようございます。」

とあいさつを交わした。ただ、私は続けて、

「いつも掃除ありがとうございます。」

と言った。急いでいたのでおばあさんの顔や反応は分からなかったが、私はちょっといいことをした気がして、その日は一日とても良い日になった。そのまた次の日、今度はおばあさんから、

「いってらっしゃい。」

と言われた。私はあわてて、

「いってきます。」

と言った。いつもとは少し違う言葉に戸惑い驚きながらもなんだか気持ちがおわつとした。前の日に言ったあの言葉はおばあさんを笑顔にし、喜ばすことができたのではないだろうか。

たった一言、

「ありがとうございます。」

私はそれしか言わなかった。いつも地域の人のために早くから起きて掃除をしているおばあさんに比べると、

通り過ぎるときに一言言っただけだったがそれでおばあさんが喜んでくれたのだと思っただけ私もうれしくなった。真顔であいさつしていた私たちだったが、「ありがとう」の日以来笑顔であいさつしている。私が少し早く家を出られてゆっくり歩いている日には軽く世間話をするほどの仲になった。ほぼ毎日話していると分かる。おばあさんは良い人だ。私とおばあさんは朝の少しの時間しか会わず、他に会うときはない。

人と人は支え合っている。よく聞く言葉だが、私とおばあさんは支え合っているのだろうか。私はおばあさんに道をきれいにしてもらっていて一方的に支えてもらっているのではないだろうか。

私は掃除があまり得意とはいえず、好きでもない。そして朝も苦手だ。寝はじめたら起きることがとても辛くなるほど。だからほぼ毎朝ギリギリまで寝て走って家を出ている。おばあさんに見たら朝早く起きること、地域のために人のために掃除をすることはなんでもないことで、私が朝走って家を出ることと同じように習慣となっているのかもしれない。ただ、その習慣がもたらすものはおばあさんと私では全然違い、私は遅刻したりしてしまったり周りに迷惑をかけてしまうかもしれない。あまり良いことではないが、おばあさんの習慣は地域をきれいにするだけでなく私の心まできれいにしてくれた。言葉は短くても人を動かす。それは私とおばあさんの

ようにいい方向に動かすかもしれないし、逆に悪い方に動かすものかもしれない。人を傷つける武器にもなる。だから私はおばあさんにこれからももっといい言葉をすれ違っても伝えられるように努力するし、これからはおばあさんのように、悪い習慣ではなく誰かのためになるような幸せにできるような習慣を身につけたいと思う。

「ありがとう」の一言で距離が縮まり、短いが色んな言葉を交わすようになった。ありがとうございますからはじまった関係だったが私に成長するきっかけをくれたおばあさんに感謝したい。